



町民文芸

只見短歌会 六月詠草

朝茶の味変りはないが孫の電話声聞きしあと尚更うまし
馬場 八智

雨のまま暮れて行く日の夕飯は早き時刻に密やかに済む
小倉 キミ子

歌会終へし峡の列車の窓に浴ひ今を盛りに栗の花咲く
古川 英子

突然の伯母の葬儀の挨拶にメモ紙歪み全ては語れず
新国 由紀子

足腰の痛み言ひつつ畑の辺に憩ふ友らと話の尽きず
渡部 ゆき子

車窓より眺む山並新緑の眩しき中に藤も真盛り
関谷 登美子

朝々に植え田見廻る老夫は浸せし指で水温をみる
目黒 富子

猛暑日と雨降り続く天候に草の丈伸び畑の緑映ゆ
渡部 ヨリ子

臥せしまま黙して見上ぐ点滴のひと粒ひと粒がわが身養ふ
新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会 七月例会

豪雨ありSNSで知る安否
油照りスマホ片手に颯爽と
信

あじさいの雨待つ気配風を見る
梅雨冷ややつれてもどる逃亡犬
味代子

風知草そよともせず池の端
水害のかなしみ残し梅雨あけぬ
弘子

体験の子等に蓑笠諸を挿す
地底より吹き出すがごと梅雨出水
恒夫

縁側に落剥くははと話すごと
青嵐や一村五十戸タムの里
礼

目黒十一 指導

汗止めの手拭しっかり葱植うる
這い這いの子に開けたる夏座敷
一穂

夏一夜ジャズの調べの響きかな
炎天下飛び石日影歩み行く
修一

降り続く豪雨の畑に虫の声
雨あがり畑の青菜の生え揃う
敦子

山揺すり家鳴り振動夏嵐
夏の月産院に満つ呱呱の声
吉児

刈草に足を取られる暑さかな
露の葉もいきれ萎れる休耕田
さちを

